

鉛魂 森野
Ver. II

アンソロジー

森野イブキ

第GG-1話：やる時はやるのが、男ってもんだ。（改）

今日の万事屋は、変な空気に包まれていた。

万事屋の三人がヒソヒソ話。

板田鉛時「おい、月読が一体ここに何のようだよ？」

榊楽「ツッキーはきっと、鉛ちゃんの顔が見たくなかったアル！恋する乙女アルね！」

詩村古八「それにしては、浮かない顔ですよ、月読さん」

月読、普段のクールさもなく、何気にしおらしかった。

月読「・・・今日は、仕事の依頼に来たであります」

万事屋一同、仕事と聞いて月読に向き直る。

鉛時「あん？吉原の二百花の頭目が俺たちに依頼？」

古八「確かに珍しいですね。荒事なら吉原の武装集団、二百花だけで充分ですし」

榊楽「あ！分かったアルね！ツッキー、ついに鉛ちゃんに求婚アルか！仕事というのはテレ隠しね！」

鉛時「そんな訳あるかって一の。この酒乱女に限って。それに仕事の依頼だって言ってるだろうが」

古八「月読さん、お話聞かせてもらえますか？」

月読「単刀直入に言おう。鉛時・・・わっちのフィアンセになってくれんか？」

赤くなる月読。鉛時、固まる。古八も、意外な一言にあ然としている。

榊楽「やっぱり、そうねー！逆告白アルよー！」

古八「でも、月読さん大胆ですねー。仕事の話とか、もったいつけなくていいんじゃないですか？」

月読、さらにほおを染める。

鉛時「・・・」

月読「やはり、日ノ輪に相談したのは、間違いじゃったかのう」

榊楽「で、結婚式はいつにするアルか？」

なぜかワクワクする榊楽。

古八「何で、榊楽ちゃん・・・ノリノリなの？」

榊楽「決まってるね。結婚式には豪華な料理が食べ放題ね！で、鉛ちゃんもツッキーも、式はいつにするアルか？」

鉛時「お前らしばらく黙ってろって一の」

鉛時、しかたなく月読に向き直る。動きがぎこちないのは気のせいかな。

鉛時「しかしだなー、急な話だな、おい」(平静を装う鉛時)

月読「すまぬ、鉛時。こちらにも急ぐ理由があったのじゃ」

榊楽「仕方ないアル、鉛ちゃん。ツッキーのお腹にはきっと鉛ちゃんの子がいるアル。急ぐのはそのためネ！」

古八「いつの間に！鉛さん・・・・・・・・おめでとうございます！」

鉛時「だーっ！何言っちゃってんの、榊楽、古八！だから、お前らは話をややこしくするなっ
一の！」

月読「な、何を言っておるのじゃ！鉛時とわっちは、そのような関係ではまだないぞ！」

月読、必死に否定。

鉛時「で、だ。本題があるんだろう？」

月読「そうじゃったな・・・・・・・・。実はの、わっちに見受けの話があつてな」

鉛時「とんだ命知らずもいたもんだな。……でも、吉原じゃ、悪い話じゃないだろう？」

鉛時の言葉に月読の表情が曇る。

榊楽「鉛ちゃん！女心が全然分かってないアルな!!」

榊楽のパンチが鉛時の顔面を捉える。吹っ飛ぶ、鉛時。壁にぶち当たり、すごい音がする。

月読「で、本題じゃが・・・・・・・・見受けの相手というのが、木ノ国屋文左衛門と言うてな。大
層きな臭い奴なのじゃ」

鉛時「・・・・・・・・そんな奴、断ればいいだろうが」

よろめきながら鉛時、席に戻る。

月読「それが出来たらそうしておる。これは吉原の掟じゃが、見受け話は余程の事がなければ断
れないのじゃ」

鉛時「そうか。で、その木ノ国屋、だったか？そんなにヤバい奴なのか？」

月読「天人(あまんと:宇宙人)相手にご禁制の品を扱って、大層儲けているらしいと聞いておる」

鉛時「・・・・・・・・」

古八「ご禁制の品を扱ってるんじゃ、幕府の役人にならまれているんじゃないですか？」

榊楽「鉛ちゃん、男を見せる時アルね！」

月読「礼金は、はずむつもりでありんす。引き受けてはもらえまいか、鉛時？」

鉛時「ま、仕事だからなあ・・・・・・・・」

頭をかく鉛時。

古八「そういえば、見受けにはすごい額が必要じゃないんですか？で、その木ノ国屋はいくら位
払うって言ったんですか？」

月読「木ノ国屋はわっちに、二億五千万と言ってきたでありんす」

榊楽「ス、すごいアル！それだけあったら、素昆布食べ放題ネ！」

古八「榊楽ちゃん、どんだけ素昆布食べたい訳？」

さすがに呆れる古八。

榊楽「10年は不自由しないアル！」

鉛時「お前ら、話が進まないだろーが。で、要するに俺はお前の男って事にすればいい訳だな？
」

月読「そうじゃ。木ノ国屋に負けないほどの金持ちを演じてもらえればいいのか」

榊楽「でも、鉛ちゃんはとってもさえない貧乏な万事屋あるよ？ツッキー、こんなんでいいア
ルか？」

月読「この際、どうこうは言われてられぬのじゃ。それに鉛時は腕の方は確かじゃしな」
古八「場合によっては荒事になるって事ですか。それで鉛時さんに……。そうですよねー。でなきゃ、ワザワザ鉛さんに頼まないですよねー」
したり顔の古八。
鉛時「古八、何気に俺の事バカにしてない？あー、鉛さん傷ついちゃったなあー」
榊楽「大丈夫アル！鉛ちゃんの心は鉛で出来てるアルよ！」
鉛時「イヤイヤ、俺の心はきれいなガラスのハートだからね。そこんところ、間違えないでね」
月読「おぬしら、真面目に聞かぬか。それでな、わっちは手紙で事の次第を告げたのじゃが…」
鉛時「あれ？それって順番逆だろう。……。何だよ事後承諾じゃねえか、おい！」
月読、無視して。
月読「木ノ国屋の奴、それじゃあその男を連れて来い、とぬかしてな。それが、明日なのじゃ」
古八「明日ですか？急ですね」
鉛時「……。ま、いいや。ようはお前と一緒に木ノ国屋に行きゃーいいんだろ？」
榊楽「私も行くアル！金持ちなら、きつとうまい飯食べ放題ネ！」
古八「榊楽ちゃんが行くなら、僕も行かないといけませんね。万事屋みんな一緒です」
鉛時「いいのか？」
月読「わっちは、別に構わないであります」

と、いうわけで、万事屋一行は、月読の依頼を受ける事となった。

(続く！)

第GG-2話：金じゃあ買えないものもある。（改）

翌日、万事屋一行と月読は、木ノ国屋の豪華な屋敷にいた。

万事屋の三人がヒソヒソ話をしている。

榊楽「これは相当ためこんでいるアルな！鉛ちゃん、お金のにおいがするアルね！」

古八「確かにすごいお屋敷ですね」

鉛時「お前ら、出てくる飯に、手をつけるなよ。何が入ってるかわかんねーからな」

月読「お主ら、どうやら来たようじゃぞ」

現れた木ノ国屋は、絵に描いたような悪人づらをしていた。お供に、二人の男を連れている。(鉛時「コイツらは...堅気じゃないな」)

木ノ国屋「いや、月読さんとそのフィアンセ...万事屋ご一行様、でしたかな？ようこそおいで下さいました」

ニコニコ微笑む木ノ国屋だが、目は笑っていない。脇の二人にも、全く隙がなく、商人には見えない。

榊楽「わざわざ来てやったんだから、料理くらいだせアル！」

古八「榊楽ちゃん、いきなり失礼だよ。す、すいません、木ノ国屋さん」

木ノ国屋「これは、ご無礼を。おい！これ、これ！」

そう言って手をたたくと、女中たちが豪華な料理を持ってくる。ずらりと並んだ料理は、万事屋の誰もが食べた事がないような品々ばかりである。鉛時、月読の前には酒もしっかり置かれている。

料理が並ぶやいなや、榊楽が素早く手を伸ばしてガツガツと食べ始めた。

鉛時「おい！榊楽、ちょっと待ってって！」

榊楽「何アルか、鉛ちゃん？」

口をもぐもぐさせる榊楽。(コイツ人の話、聞いてねー。ま、毒はさすがに入っていないだろうがな...)

木ノ国屋「さ、遠慮なさらずに、みなさんもどうぞ」

そう言って、木ノ国屋はにこやかに微笑んでいる。榊楽は、鉛時の注意を無視してひたすら食べている。古八は、さすがに水にしか手をつけない。月読は鉛時に目配せすると、酒を飲むふりをする。仕方なく、鉛時も月読にならって飲むふりをしておく。

木ノ国屋「さて、お呼びだててすみませんが、早速本題に入らせていただきます」

そう言った木ノ国屋はまじまじと鉛時を見る。

鉛時「あ、一応は俺、コイツのこれですからー。よろしく」

そう言って、鉛時は親指を立てる。それを見た月読が少し照れた。

月読「というわけでありんす。この万事屋のダンナは、わっちに二億八千万円出すそうじゃ。それで木ノ国屋殿、手を引いてはくれぬか？」

木ノ国屋「ほおー。まだ若いのに、頑張りますな〜。わっはっは！」(鉛時「わー、なんか余裕かましちゃってるよー、この人」)(月読「あせるな、鉛時。こっちこそ、余裕を見せるのじゃ」)
目配せしあう二人。

木ノ国屋「では、私は三億出しましょう。月読さん、どうですか？」

月読は、鉛時をつつく。冷や汗をかく鉛時。

鉛時「いやー、木ノ国屋さんも頑張りますねー。じゃ、こっちは三億二千万円で」

木ノ国屋「では、三億五千万円でいかがですか？」

木ノ国屋は涼しい顔だ。一体どれだけ金持ちなのか。(鉛時「コイツ、マジもんの金持ちだよー！俺にも少し分けてくれよー！」)(月読「鉛時、もっと大きくでぬか！」)鉛時のひたいに汗がにじむ。

鉛時「じゃあ...よ、四億！これでどうだ！」

鉛時、ハッターとはいえ、この金額を言うのはさすがにキツイ。

木ノ国屋「では、四億五千万円」

木ノ国屋の表情から笑顔が消えた。(月読「鉛時、もうひと押しじゃ」)(鉛時「これで、ツメだな」)

鉛時「んじゃあ、五億で。これで決まりっすよね〜」

鉛時が引きつった笑いを見せる。木ノ国屋の手が、プルプルと震えている。

木ノ国屋「お若いのに、無理しなさる。ここはこの年長者に譲ってはもらえませんか？悪い事は言いません。あなたのためですよ」

木ノ国屋の目が、厳しくなる。

鉛時「本当はさあー、金でどうこういう話じゃないだろう。色恋ざただしな。分かるかい、木ノ国屋のダンナさんよー？」

木ノ国屋、左右に目配せすると、目に殺気が宿る。

木ノ国屋「では、どうあっても引かないとおっしゃるのですな？」

鉛時「クドいよー。オッサンの未練たらたらは見苦しいっての」

木ノ国屋は、立ち上がると左右の男たちに告げた。

木ノ国屋「・・・やれ！」

その一言を合図に部屋に浪人たちがなだれ込んできた。

鉛時「ここは俺と月読に任せろ。古八、榊楽！あとは、手はず通りにな！」

榊楽「分かったアル！死ぬなよ、特に鉛ちゃん！」

鉛時「死亡フラグが立ったみたいに言うなってーの！」

鉛時と月読が引きつけているすきに、古八、榊楽は庭に飛び出す。

庭からは「鉛ちゃん〜！死亡フラグって何アルか〜！」と聞こえたが、今はそれ所ではない。

木ノ国屋「一人も逃がすな！追え！」

庭に出た二人にも追っ手が出ていく。

鉛時「あらー、そんなに人裂いちゃっていいのかな〜？」

鉛時の言葉にも、ニタリとする木ノ国屋は余裕顔だ。

木ノ国屋「女は生かして捕らえろ！男は殺して構わん！」

浪人たちが二人を囲む。

月読「さて行くぞ、鉛時！」

鉛時「ま、ちゃっちゃと済ませようぜ！」

浪人たちに囲まれながらも、二人は笑顔だ。鉛時は、愛刀(木刀)の東寺湖で、月読は両手にクナイ(手裏剣の一種)をそれぞれ構える。

浪人その1「木刀など持ちおって、なめるなあー！」

勢いは良かったが、あっさり鉛時にかわされて、フスマに突っ込んでいく。鉛時、頭をかく。別の浪人が鉛時に切りかかる！それを軽く受け止める鉛時。

鉛時「何これ？チャンバラごっこですかーってーの！」

必死の浪人を軽く足で蹴り飛ばす、鉛時。一方、月読にも浪人たちが迫る。が、囲まれていたはずの月読は軽く回りながら、クナイを投げつける。浪人たちは、一瞬で壁にクナイで縫い付けられる。

木ノ国屋「何をやっているか！相手はたかが二人だぞ！」

浪人その2「二人って、話が違いますぜ、ダンナ。ただの万事屋と吉原の警備の女じゃないんですか〜？」

情けない事を言う浪人である。

木ノ国屋「いいから、行けい！」

鉛時に突っ込む、浪人その2。木刀、東寺湖に峰打ちをくらい、あっさりと気絶する。力の差は歴然だった。その結果、立っているのは鉛時と月読、対する浪人はあと一人きりだった。しかし、木ノ国屋はまだ余裕の顔だ。

木ノ国屋「それじゃあ、よろしくお願いします。先生！」

先生と呼ばれた浪人は、これまでの奴らとは構え方が違う。

？「俺は又野文左衛門。元攘夷志士だ！どうだ、驚いたか！...って、あれ？お前、どこかで見たような...」

鉛時「何？又に文左衛門？...知らねーなあ」

鼻をほじる鉛時。

又野「な、なめるなあー！」

又野は庭に出て、鉛時を誘う。対するニタリ顔の鉛時。

両者、同時に動いた。駆け寄って二人の剣が、交錯する。勝負は一瞬でついた。片や木刀、もう一人は真剣。バタリ、と片方が倒れた。倒れた男が、つぶやいた。

又野「そうか、思い出したぞ。貴様があの伝説の、白夜叉(しろやしゃ)か...」

そこで、又野の意識が途切れた。

鉛時「後は、ラスボスですかー？...弱っちーのが残ったもんだ。とんだ役不足だな」(笑)

月読のクナイが、木ノ国屋を逃げられないように縫い付ける。その時、古八と榊楽が戻ってきた。

古八「鉛さん、見つけましたよ！ご禁制の品。蔵にいっぱいです」

榊楽「あんなの隠してるうちに入らないアル。柔らかい扉だったアルな！」

木ノ国屋「馬鹿な！南蛮の鋼鉄製だぞ、あれは!？」

鉛時「うちの榊楽は夜ト族でな、宇宙三大戦闘民族の一つだ。それより古八！例の手紙、ゴリラに渡したか？」

古八「ああ、新鮮組の近同さんですね。はい、しっかりと。姉上がここに捕まってるって書いてきましたよ。取引の時間も指定してますから、もうそろそろ来るはずですよ」

鉛時「そうか。じゃ、あんたは眠ってな」

木ノ国屋「どうだ、万事屋。わしと組まんか？お前の腕なら、高く買うぞ？」

あきらめの悪い奴である。

鉛時「男にはよお、金じゃあ譲れないものがあるんだよ。ま、あんたには一生分かるまいよ」

東寺湖の峰打ちで、木ノ国屋は気絶する。

鉛時「じゃあ、ゴリラが来る前に帰るぞ」 そう、鉛時が言った瞬間。

？「お紗さーん！この近同功が助けに来ましたよー！」

榊楽「もう来たアル！」

いっせいに、駆け出す万事屋一行と月読。門で近同とすれ違う。

近同「あ！万事屋！えっ?何で!？」

鉛時「はい、選手交代ねー！」

なぜかハイタッチする二人。

駆け去る万事屋たちをさらに、二人が見送る。新鮮組の二人だ。

起田総合「近同さんの後を追いかけてみれば、何かとんだ拾いものの匂いがしますぜ」

土方九四郎「ちっ！ヤツに借りを作るのは気が進まないがな」

その時、木ノ国屋邸の中から、「なんじゃこりゃー！」と叫ぶ声がした。

起田「ゴリラが何か叫んでますがねー」

土方「総合、仮にもあれで近同さんは俺たちの上司だ。口が過ぎるぜ」

そう言って土方は、タバコに火をつけて一服したのだった。

後日。万事屋にて。

榊楽「三万アル～！これで素昆布食べ放題ネ！」

古八「でも、ここに来て初めてまともに給料もらった気がしますよ～」

上機嫌な二人。

鉛時「しかし、月読のやつ...ギャラが十万とはな。ま、いいか...」

榊楽「ちょっと待つアル、鉛ちゃん。今、十万って言ったアル！」

古八「やっぱり三等分するのが筋じゃないですか、鉛さん？」

鉛時に、にじりよる二人。

鉛時「おい！俺は万事屋の主だよ。大人だよ？待て、待て二人とも～!!」

逃げ回る鉛時。追う二人。

そこに二人の来客が。

月読「鉛時、来たぞ」

詩村紗「鉛さんは居るかしらー？」(殺気をみなぎらせて)

紗「あら、奇遇ねえー。あなたも鉛さんに用が？」

月読「うむ。わっちも鉛時に、お礼がてらにな」

紗「あら、偶然。私もなのよー。おーっ、ほっほっほ！」

この時、鉛時はまだ、新たな脅威に気づかなかったのであった。

(終わる！)